

45歳の おっさん、 異世界召喚に 巻き込まれる



45sai no ossan, isekaishokan
ni makikomareru

2

著者
よっしい

イラスト：市丸きすけ





クインシー

エトムントの庶子にして、スランク冒険者。掴みどころのない雰囲気ながら、戦いの腕前は一級品で頼りがいがある。

エルヴィーラ

セアリアス帝国の第一王女。気品あふれる絶世の美女だが、戦闘になると人格が変わり……？

エトムシト

白河が身を寄せたセアリアス帝国の皇帝。我儘放題に見えて、慈愛の心も兼ね備え、国民からの人気は高い。

サーージュ

ファートとコンビを組む謎多き冒険者。探求心が強い。

ファート

サーージュとコンビを組む謎多き冒険者。お姉さんぶるのが好き。

杉浦香苗

白河とともに召喚された怖がりなOLで、抜群の料理の腕を持つ。小悪魔っぽい一面も？

メーネア

召喚の儀式を行った王国の王女。王城では冷遇されており、その環境を変えるため白河に同行する。

オリアーナ

帝国有数の大商会を切り盛りする女傑。だが、思い込みが激しい。

白河小次郎

本作の主人公で、心優しく45歳のおっさん。突如異世界に召喚されるが、発現した無数のスキルで楽しく生きる。

 Characters

第一話 アフェールの新拠点と魔改造

この世界に召喚されてから一月が過ぎ、また一月が過ぎようという頃。

俺——白河小次郎、四十五歳のおっさんの異世界生活も、ここ商業都市アフェールに拠点を構えたことで、ようやく、ほんの少しだけ落ち着きを取り戻しつつあった。

いやまあ、落ち着いたとは言っても、物理的な意味だけなんだがな。

おっさんの心の中は、いまだに台風一過どころか、台風のご真ん中にいる気分だ。ところで、朝、淹れたてのコーヒーを飲むのが、すっかり日課になっている。

スキルで購入した自家発電用の大型発電機が、風車のかすかな回転音に混じって静かで安定した唸りを上げているのが分かる。

こいつがまた、なかなかの優れものでね。

日本の一流メーカー製で、ちよつとした町工場ぐらいなら余裕で電力を賄える代物だ。

その電気を使って、これまたスキルで取り寄せた全自動エスプレッソマシンが、豊かな香りを立てながら黒い液体を抽出していく。

「……ふう」

日本にいた頃は、一日に三杯は欠かさなかったからなあ。

ブラックで、砂糖もミルクも入れないのが俺の流儀。

この香り、この苦味。

……その、すまん、見栄張って嘘ついてた。

俺、ミルクも砂糖も入れる派だった、マジすまん。

これだけは、異世界に來ちまった今でも変わらない、俺の心をリセットしてくれる大事な儀式なんだ。

淹れたての熱いコーヒーをまた一口する。

うん、美味い。

豆は、もちろん日本から取り寄せた最高級のキリマンジャロだ。

贅沢だって？

いやいや、これくらいは許してほしい。

おっさんの唯一の贅沢なんだから。

結婚する前はどちらかというと紅茶派だったんだが、妻が試しにイタリアの有名メーカーのエスプレッソマシンを買ってきて以来、見事にはまって今に至る、と。

そのときの妻のドヤ顔、今でも思い出すと笑える。
あのエスプレッソマシンには本当に足を向けて寝られない。
うん。

この異世界で取り寄せたのは、さらにその上の業務用モデルだけだな！

さて、改めてだが、日本からこの異世界に召喚されてしまってから、もうすぐ二月が経とうとしている。

皆さんお元気ですか、と心の中で呼びかけてみるが、当然、返事はない。

分かっているよ。

分かっているけどさ。

それでもしないと、やってられないときがあるんだ。

おっさんは、まあ、何とか元気にやっている。

……なんて、強がってはみたものの。

実際のところ、どうなんだろうな。

体は元気でも、心は毎日すり減っている。

そんな感じだ。

こうして静かな朝を迎えていると、あの日の出来事がまるで嘘のようだ。
全ての始まりは、あのいつも通りの通勤電車の中だったな……。

気づいたら異世界の城の中にいて、胡散臭い連中が「勇者召喚だ」なんて言ってきたけど、真っ赤な嘘っぱちだった。

連中の本当の目的は、俺たち日本人からスキルを奪って用済みになったら殺すこと。

世も末だよな。

俺のスマホに偶然表示された『鑑定』スキルで、『強奪の腕輪』の正体を見破ってなきや、今頃どうなっていたことか。

もう時間がない。

そう思った俺は、時間稼ぎと状況を探るために、尿意を我慢できないと伝えてトイレに連れていつてもらうことにしたんだ。

そこで出会ったのが、黒光りするデカイG（ゴキブリ）。

なぜかそいつと意思疎通できちまつて、俺に『ティマー』スキルがあることが発覚した。

とんでもないスキルだが、このダチになったGがあとで最高の仕事をしてくれたんだよな。

トイレからの帰り道、案内役だったメーネア王女（用済みだからと実の父親に殺される運命だったとのちに知った）と、同じく巻き込まれた香苗ちゃんと三人で、生き残るために一世一代の大芝

居を打つことにした。

いよいよ俺のスキルが奪われる番が来たとき、一瞬の間隙をついて大臣の腕に『強奪の腕輪』をはめて、覚えておいたスキルを奪う呪文を唱えてやった。

おっさん、こういうハツタリと機械いじりは得意なんだわ。

スキルを奪われ、崩れ落ちる大臣や兵士たち。

混乱の極め付けに、ダチのGたちが大群で押し寄せ、兵士たちをパニックに陥れる。

その隙に、俺たちはメーネア王女の案内で堂々と城の正面からずらかった。

こうして、俺と香苗ちゃん、それにメーネアちゃんの、長くて危険な逃亡劇が始まったんだ。

城を出てからも、もちろん楽な旅じゃなかった。

追手もいるかもしれないし、金もなければ身分を証明するものもない。

それでも、俺がスキルで奪った道具と金、それに日本から取り寄せた物資を元手に、何とか食いつなぎながら国境を目指したんだ。

今思えば、無謀な計画だった。本当に、よく生き残れたもんだ。

魔物と遭遇し、死にかけたこともあった。

それでも、おっさんのスキルと、メーネアちゃんの機転、香苗ちゃんの料理（これが本当に美味くて、何度も心を救われた）で、何とか危機を乗り越えて、隣国であるセアリアス帝国の商業都市

アフエルまで逃げ延びてきた、というわけだ。

濃すぎるだろ。普通に考えて。

ライトノベルでも、もうちょっと展開に間があるぞ。

アフエルでは、トレイナー商会というデカイ店の娘さん——オリアーナと、まあ、ちょっとした事故（おっさんが原因）で知り合ってたな。

いろいろあったんだが、結局トレイナー一家に気に入られちゃった。

おかげで、街外れにあった『ワケあり』のゴースト屋敷——本当に幽霊が出やがったんだ、これが——を格安で手に入れることができて、そこを拠点にしたんだ。

なんてたって、この屋敷では日本との通信が可能だったからな。

ちなみにあとからまた話すが、今じゃ、おっさんのスキルで取り寄せた日本の品物（シャンプーとかリンスとか）を売る店まで開いちまって、何とかこの世界での基盤を築きつつある。

……これが、ここ二ヶ月の、おっさんの人生で起きたことの、ざっくりとしたあらすじだ。

日本に帰りたい。妻や子供たちに会いたい。その気持ちは、一日だって忘れたことはない。

この気持ちを忘れたら、俺は俺でなくなっちゃう。

おっさんの持つ『異世界売買』スキルだって、日本の商品は取り寄せられるのに、こっちの物を日本へ送ることはできない、一方通行のスキルだ。

情報伝達も同じで、妻とのメールのやり取りも、以前屋敷の書斎で試して以来、一日に百文字程度の短いメッセージを送受信するのがやっと。

写真データも、サイズを極限まで圧縮しないと送れない。

動画なんて、数秒のものを送るだけで何時間もかかる始末だ。

『元氣か？』

『こっちは元氣だよ』

『愛してる』

そんな、電報みたいなやり取りが限界。もどかしい、本当に。

それでも、妻から送られてくる息子や娘の動画や写真は、何よりの心の支えだった。

だから、おっさんは諦めない。

この世界で生き抜いて、情報を集めて、絶対に日本へ帰る方法を見つけ出す。

そのための、拠点作り。

そのための、資金稼ぎ。

今やっていることは、全て、日本へ帰るといふ最終目的のための布石なんだ。

この店も、この家も、全部が日本へ繋がっている。

そう信じている。

そう自分に言い聞かせないと、心が折れそうになるときがある。

……ただ、一つ大きな問題があつてだな。

一つ屋根の下で、うら若き美女二人と暮らすというのは、四十五歳のおっさんには、正直言って刺激が強すぎる。

メーネアちゃんも香苗ちゃんも、俺のことを命の恩人だと慕^{した}ってくれていて、その距離感が、日に近くなっている気がしてならない。

いや、おっさんの自意識過剰^{かしよう}だよな？

そうだよな？

向こうは俺を父親か、あるいは歳^{とし}の離れた兄のように思っているだけだ。

きっとそうだ。

そうに違いない。

それでも思い込まないと、こっちの理性が持たないんだって。

おっさん、初心者なんだから。

で、今朝^{けさ}もリビングの食卓では……。

「シラカワ様、おはようございます。今朝は少し冷^{ひや}えますから、こちらのスープをどうぞ。体が温

まりますわ」

メーネアちゃんが、にこやかに湯気の立つカップを差し出してくれる。

「ああ、ありがとう。助かるよ」

「白河さん！ こちらのパン、新しく焼いてみたんです。味、どうですかね？」

香苗ちゃんが、期待に満ちた目で俺を見つめてくる。

「うん、美味しいよ。外はカリッとしてて、中はふんわりだ。天才だな、香苗ちゃんは」

「えへへ、ありがとうございます！」

「カナエさんのパンは本当に絶品^{ぜっぴん}ですわ。わたくし、ここに来るまでパンというものをあまり好んで食べなかったのですが、今では毎朝の楽しみになっておりますもの」

メーネアちゃんも、うっとりとした表情でパンを一口食べる。

「メーネアさんにそう言っていたんだけど、作った甲斐^{かい}があります！ 白河さんが日本から取り寄せてくれたレシピ本が本当にすごくて。毎日が発見です」

香苗ちゃんは、俺がスキルで取り寄せた料理本を、今ではすっかり自分のものになっている。

おっさん、おかげで毎日美味^{うまい}い飯^{めし}が食えて、本当に助かってます。

どうやら、異世界の食材を使いながら、日本の調理法や味付けを再現するのにハマっているらしい。

彼女の探求心と才能には、本当に頭が下がる。

「でも、すごいのはシラカワ様もですわ。だって、わたくしが知らない道具や知識を、まるで魔法のように取り出してくださるのですから。この前いただいたマヨネーズっていう調味料も、びつくりするくらい美味しかったです」

「ああ、あれな。野菜にも合うし、パンに塗^ぬっても美味いんだ」

「はい！ ですよーね！ だから今日はそのマヨネーズを使って、新しいサンドイッチを試作してみようと思ってるんです！」

キラキラした目で語る香苗ちゃん。

本当に料理が好きなんだな。

こんな風^{ふう}に、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのは、本当にありがたい。

ありがたいんだが……。

近い近い近い！ 距離^{きょり}が！

二人とも、俺^{おれ}の隣^{となり}にぴったりと座^まってくるもんだから、シャンプーのいい香りが漂^{ただ}ってくるし、目のやり場に困^{こま}っちゃう。

駄目^{だめ}だ駄目^{だめ}だ。

俺^{おれ}には日本に愛する妻と子供たちがいるんだからな。

香苗ちゃんたちは、俺^{おれ}が保護すべき大事な家族……みたいなもんだ。

うん。

断じて、そういう目で見てはいけない。

……なんて、毎日自分に言い聞かせてるおっさんの身にもなってくれよな、本当に。

この生活、いつか理性のタガが外れそうで、正直めちゃくちゃ怖^{こわ}い。

夜、物音で目が覚めたとき、静かな寢息を立てている二人と二つ屋根の下にいますというだけで、心臓^{みぞう}が妙な音を立てる。

これ以上は、本当にまずい。

さて、おっさん、日本に戻れない可能性も常に頭の片隅に置きつつ、こちらの世界で少しでも充^{じゅう}実^{じつ}した生活を送れるようにとあれこれ考えている。

それで手に入れたこのアフエールの家に、いろいろと手を加えずぎて、ちょっとした魔改造状態になってしまっているんだ。

どんな風になっているか、具体的に話していくとしよう。

これも全部、日本に帰るための布石なんだからな！ 多分！



改造その一、電力インフラ整備。

まずは電気だ。

近代文明の根幹、それが電気。

ステータスを見たりスキルに利用したりできる石板プレートで、『異世界売買』を開いて検索したら、普通に家庭用の小型風力発電機が売られていた。

それで、思わずポチっとしてしまったのだ。

で、届いた方がいいが、このままでは重すぎて屋根の上どころか、庭に設置するのも一苦勞だ。

「な、なんですの、これは……鉄の巨人、ですの？」

メーネアちゃんが、庭に鎮座する風車のパーツを見て目を丸くしている。

「いやいや、鉄の巨人じゃなくて風車だって。これで電気を作るんだよ」

香苗ちゃんですら、現代日本の知識があるとはいえ、実物を見るのは初めてのように、興味津々だ。

そこで、これまたスキルで小型のクレーン車とパワーシヨベルを購入。

おっさん、こういう重機、好きなんだわ。

子供の頃、ミニカーでよく遊んだもんだ。

日本ではフォークリフトの免許を持っていたから、建設機械の操作もまあ基本は同じようなものだろうと高を括っていたら……思った通りすんなり操作できてしまった。

「シラカワ様、その鉄の馬は、一体どのように動かすのですか？ 魔法ですの？」

「いや、これはガソリンっていう燃料で動くんだ。まあ、魔法みたいなもんだけどな」

俺はレバーを操作し、パワーシヨベルのアームを巧みに動かしてみせる。

二人は「おぉー！」と歓声を上げた。

ちよつとしたヒーロー気分だ。

パワーシヨベルで庭に基礎の穴を掘り、クレーンで風車の支柱を吊り上げて設置。

その後、速乾性のコンクリートを流し込んでガッチリと固定。

「す、すごいです……白河さん。まるで土木工事の職人みたい」

「いやあ、ゲームでやったことがあるだけだよ」

本当は似た経験をしたことがあるんだけど、見栄を張ってしまった。

シミュレーションゲームが好きだったのは本ただけど！

そのあととも試行錯誤を繰り返し、随分と苦勞はしたが、何とか安定した発電ができるように

なった。

そして、その日の夜。

俺は二人をリビングに集め、天井から吊るした裸電球はだかでんきゅうのスイッチを入れた。
パツ！

温かいオレンジ色の光が部屋を満たすと、二人は感嘆の声を上げた。

「まあ……！」

「わあ……！」

「これが、でんき……。ロウソクでも魔法でもないのに、こんなに明るいなんて」
メーネアちゃんが、うっとりとして電球を見上げている。

やってみるもんだね、本当に。

「すごい……すごいです、白河さん！　これがあれば、夜でも本が読めますね！」

香苗ちゃんは、子供のようにはしゃいでいる。

そうだよな、この世界では夜の明かりは貴重なんだよな。

日本の当たり前が、ここでは特別なことなんだと、改めて思い知らされる。

で、調子に乗って、敷地内を流れる小川を利用した水力発電にも手を出してみたんだが、これが

なかなか上手うまくいかなくてね。

一週間ほど悪戦苦闘あくせんくとうして、ようやくこちらでも何とか実用レベルの発電ができるようになった。

こういう試行錯誤しこうさくご、嫌いじゃない。

むしろ、燃えるタイプだ。

発電システムは、一つだけだと何かあったときに心許こころやすみないからな。

複数確保しておくのが、サバイバルの基本だろ？

今、我が家の庭には、大小合わせて十基じゅうつきの風車ふうぐるまが悠々と回り、小川では水車がカラカラと音を立てている。

これだけ自家発電できれば、夏場の冷房れいぼうも、冬場の暖房だんぼうも、奥の厨房ちゅうぼうで使う大型オーブンだつて、電気代を気にせずガンガン使えるというものだ。

実に素晴らしい。

改造その二、温浴施設おんよくしかしの拡充。

おっさん、何を隠そう無類の風呂好きでね。

日本にいた頃は、毎日の入浴が何よりの楽しみだった。

だから、この異世界の家でも、絶対に快適な風呂を実現したかったんだ。

できれば、日本の温泉旅館並みの、広々としたやつをな。

というわけで、『土魔術』と、スキルで購入した防水材や配管資材を駆使し、優に十人ぐらいは一度に入れるんじゃないかという、とんでもなくデカイ浴槽を作っちゃった。

やりすぎた感はない。

完全に温泉旅館の大浴場だ、これ。

念のため、男女別で二つ作った。

ただ、今のところはメーネアちゃんと香苗ちゃんと、ときにはオリアーナも加わって三人、四人で一緒に入浴しているから、一つしか使っていない（もちろん、みんな湯あみ着のようなものを着ている）。

「やっぱり、広いお風呂は気持ちいいですね」

「本当ですね。シラカワ様の故郷では、これが普通なのですか？」

湯船に浸かりながら、香苗ちゃんとメーネアちゃんが続けて言った。

「いや、普通はもっと小さいけどな。でも、手足を伸ばして湯船に浸かるのが、日本人にとっては最高のリラックス法なんだよ」

羨ましいだつて？

いやいや、おっさん的には、たまには一人で手足を伸ばして、のんびりと湯船に浸かりたかつ

ただけだなあ。

美女と一緒に入浴しておいて贅沢言うな、と怒られそうだが。

全く、申し訳ない限りだ。

役得だなんて、これっぽっちも思っていないぞ。

本当だぞ。

改造その三、商業施設の建設。

おっさん、この家を手に入れたときから、ちょっとした店を開いてみたいと考えていた。

通りに面した離れを、本格的な店舗に改装しちまったんだ。

これも、日本に帰るためだ。

大きな情報を得るには、金と、人脈がいる。

ここは、そのための拠点だ。

どんな店にするか、トレイナー商会の当主・ロニーさんやオリアーナにも相談したんだけど、最終的には女性向けの高級雑貨店というコンセプトに落ち着いた。

「女性向けの店、だつて？ シラカワ様が？」

オリアーナに初めてこのアイデアを話したとき、彼女は目を丸くしていた。

「ああ。俺の故郷の品物には、この世界ではまだ誰も見たことがないような、女性が喜ぶものがたくさんあるんだ。それを売れば、きつと大きな話題になる」

「……なるほどね。確かに、シラカワ様が持っているのはあたいらが見たこともないような品々だもの。それに、女相手の商売は口コミが命。一度火が付けば、一気に広まる可能性を秘めてるわ」さすがは商人の娘。

すぐにビジネスとしての可能性を見抜いたようだ。

オリアーナの目が、好奇心と野心でギラギラと輝き始めた。

目玉商品は、もちろんおっさん特製の石鹸、シャンプー、リンス。

最近では、香苗ちゃんの意見も参考に、日本から取り寄せたクレンジングオイルや化粧水、乳液なんかもラインナップに加えている。

日本が誇る老舗メーカーや、王室御用達クラスの一流ブランドのやつだ。

そして、オリアーナに相談したあと、さっそく店として屋敷の離れを生まれ変わらせることにしたんだよ。

店舗の外観は、思い切って真っ白に塗り替えることにした。

もとが『ゴーストが出る』なんて言われる薄汚れた幽霊屋敷だったからな。

陰気な雰囲気^{いんき}を払拭^{はつしき}したかったし、何よりこれから扱うのは女性向けの化粧品や肌着、装飾具^{そうしきぐ}だ。清潔感^{せいせつかん}が命だろう。

この街の建物は、レンガ色や石の灰色、あるいは古びた木の色がほとんどだ。

その中で、陽の光を反射して輝く白亜の壁は、死ぬほど目立つ。

だが、それがいい。

ランドマークとしての宣伝効果^{せんでんこうか}は抜群だ。

看板も、スキルで取り寄せた木目の美しい板に、こちらの世界の言葉で店名を彫り込み、ニスを塗って仕上げた特製のものを掲げた。

そして、何よりこだわったのが内装、特に『光』だ。

店内には、『異世界売買』で購入したLED照明や、お洒落なペンダントライトを惜しげもなく設置した。

風車と発電機のおかげで、電気は売るほどあるからな。ケチる必要はない。

夜になると薄暗いオイルランプの明かりで過ごすのが常識のこの世界だ。

影一つない昼間のような、いや、それ以上に眩い光に満ちた店内は、それだけで客の度肝を抜くはずだ。

その圧倒的な光を受けて、ガラスケースの中に並べたシルバークセサリーや、色とりどりの化

粧瓶がキラキラと宝石のように輝くわけだ。

壁紙にも工夫を凝らした。

清潔感のある白と、落ち着いた木目調のリメイクシートを貼って、モダンな雰囲気仕上げたんだ。

これぞ、異世界における『光と白の魔改造』だ。

完成した店を見たメーネアちゃんと香苗ちゃんは、「まあ、お城よりも明るいですわ!」「日本のお洒落な雑貨屋さんみたい!」と手放しで絶賛してくれた。

さて、開店初日。

「本当に、お客さんなんて来るんでしょうか……」

香苗ちゃんが、不安そうに店の入り口を眺めている。

「大丈夫だ。いい品を揃えれば、必ず客は来る」

なんて偉そうなことを言ったものの、おっさんも内心ドキドキだった。だが、その心配は杞憂に終わった。

一度来店した客からの口コミで評判が広まったのか、アフエールの富裕層の奥様方を中心に、開店から一週間も経たないうちに、連日大盛況となった。

「まあ奥様! この『しゃんぷー』というものを使ったら、髪がサラサラになりましたのよ!」

「こちらの『りんす』も素晴らしいですわ! 髪がまるで絹のような手触りに!」

店内のあちこちで、そんな喜びの声が聞こえてくる。

本当にありがたいことだ。

商売の基本は口コミ、ってことだな。

ネット社会の日本でも、結局はそこが一番大事だったりするし。

しかも、それだけじゃない。

日本から取り寄せた高品質な綿素材の肌着や、デザイン性の高い下着類も扱っていてね。

これがまた、目の肥えた女性たちにすごい評判で、連日飛ぶように売れている。

その他には、比較的手頃な価格のシルバークセサリーや、一点豪華主義でダイヤモンドのネックレスなんかもショーケースに並べている。

シルバークセサリーの方は、そこそこの身なりの若い娘さん方が、自分へのご褒美にと頑張って買っていくくれるようだ。

ダイヤのネックレスの方は……たまに、どう見ても大貴族の奥方様みたいな、とんでもなく気品のあるご婦人が見にこられたりする。

ただ、おっさん、これに関してはかなり強気の、それこそ家が一軒買えそうな値段設定にし

ちゃったから、流石にまだ売れてはいない。

まあ、これは半分客寄せパンダみたいなものだから、当分売れなくても構わないんだけどね。それから他にも、日本から取り寄せたさまざまな雑貨（例えば、切れ味のいいセラミック包丁とか、保温性の高い魔法瓶とか、デザインの可愛い文房具とか）も試験的に売っている。

おっさん、これらの商品の仕入れと在庫管理に結構忙しくて、嬉しい悲鳴を上げている状態だ。日本とはまるで違う需要があったりして、なかなか面白い。

意外なものが売れたり、逆にこれは絶対売れると思ったものがさっぱりだった。

市場調査つてのは、本当に奥が深い。

ちなみに、おっさん、商人としては全くの素人だから、店の実際の運営は、オリアーナに全面的に任せることにした。

店員も、トレイナー商会から何人か優秀な女性を派遣してもらってね。

全員、明るくて接客態度の素晴らしい人たちがばかりだ。

ロニーさん曰く、トレイナー商会ほどの大きな組織になると、有能な人材がいても、その全員に店を持たせてあげられるわけではない。だから、こういった形で新しい店を立ち上げ、そこに人材を派遣できるのは、むしろ歓迎すべきことらしい。

日本で言うところの、のれん分けに近い感覚なのかな。

あ、そうそう、香苗ちゃんにもやってもらってることがあるんだ。

おっさんが提案した新しいサービスなんだけど、店舗の奥に併設した小さなカフェスペースで、来店してくれたお客さんに簡単な食事や飲み物を提供してくれている。

こちらも、彼女の作る料理の味が評判を呼び、大変な好評を得ている。

香苗ちゃんも、毎日忙しそうに、でも生き生きと働いているのが印象的だ。

やっぱり、人は役割があると輝くもんだな。

あまり暇を持て余していると、日本のことをかを思い出しているろと塞ぎ込んだじゃいそうだからな。

というのが、香苗ちゃんとのサービスの始めた本当の目的なんだが、どうやら彼女の性にも合っているみたいで、本当によかった。

そしてメーネアちゃんには、主に貴族の奥様方のお相手をしてもらっている。

「あら、メーネア様。先日ご紹介いただいた石鹸、主人も大変気に入ってりましたのよ」

「それはようございました。本日、新しい香りのものも入荷しておりますから、よろしければご覧になってくださいませ」

さすがは元王女様。

貴族社会の複雑な人間関係や、立ち居振る舞いの機微といったものを知り尽くしているからか、こちらにも非常にスムーズに、そしていい形でお客様との関係を築けているようだ。

おっさんには到底真似できない芸当だな。
うん。

あんなマダムたちの会話、俺が混ざったら三秒で地蔵になる自信がある。

それと、言っていなかったことがあるんだが……。

販売する石鹸やらシャンプーやらの詰め替え作業は、まずは一パック、大容量の状態で取り寄せ、それを小さな容器に詰め替えて販売する方法をとることにしていた。

正直なところかなり面倒な手間仕事なので、こちらは専門の人を雇ってやってもらっている。

いや、正確に言うと、『雇う』というのとは少し違うかな。

うーん、包み隠さずに言うと、いわゆる『奴隷』を使っている。

この世界では、奴隷制度というものが当たり前のよう存在しているんだ。

おっさん個人としては、倫理的にどうかと思う部分も大いにあるんだが……。

ただ、この世界の奴隷というのは、主人が何でも自分の好き勝手に扱えるというわけではなく、

ちゃんとした衣食住を提供し、人間的な扱いをすることが法律で義務付けられているらしい。

下手に暴力を振るったり、過酷な労働を強いたりすれば、逆に主人が罪に問われ、厳しい罰を科されることにもなりかねないそうだ。

まあ、建前だけかもしれないが、一定の歯止めにはなるようだな。

そもそもの話をすると、シャンプーやリンスを販売するにあたって、一番頭を悩ませたのが、それを入れる容器の問題だった。

結局、この世界では、おっさんの美的感覚にかなうような、手頃で品質のいい容器を見つけ出すことができなかった。

なので、最終的には、日本から無地の安いプラスチック製のシャンプー用ボトルを大量に購入することにした。

そして、そのボトルに、スキルで取り寄せた大容量の詰め替え用シャンプーやリンスを、奴隷の人たちに移し替えてもらうという作業を依頼することにしたわけだ。

こちらの詰め替え作業は、さすがに自宅の敷地内で行うのはいろいろと問題がありそうだったので、街外れに別の作業場を借りてやっている。

おっさん的には、自宅の敷地の一角でやってもらえれば管理も楽だと思ったんだが……。

よくよく考えてみれば、そうすると素性のよく分からない多数の人間を、日常的に自宅の敷地内

に入れなければならない。

それは、防犯上も、プライバシーの観点からも面倒なことになりそうだったので、別の場所を用意したのだった。

ただ、その福利厚生として、住居や食事、風呂などはきちんと用意している。ブラックな環境にするつもりは毛頭ない。

ある日のこと、俺はオリアーナと一緒に、その作業場を訪れていた。

店の経営を任せている彼女に、現場の責任者として従業員たちの様子を見てもらうためだ。

「みんな、真面目に働いてくれてるな」

倉庫の中では、男女数人が黙々とシャンプーの詰め替え作業を行っている。

その手際は、日に日によくなっているように見えた。

「うん。シラカワ様が用意してくださったこの環境に、みんな心から感謝してるみたい。食事も、住む場所も、以前の生活とは比べ物にならないって」

オリアーナの言葉に、俺の胸は少しだけちくりと痛んだ。

「……そうか。なあ、オリアーナ。この人たちは、確か『借金奴隷』なんだよな」

「そうよ。ほとんどが、重い税金が払えなくなったり、商売に失敗して借金を抱えたりして、やむ

なく自分や家族を売って奴隷になった人たちだよ。契約期間を終えるか、誰かが身請け金を払えば解放されるけど……まあ、ほとんどの場合は難しいわね」

オリアーナは、淡々とした口調で説明する。

それが、この世界の常識なのだろう。

「……犯罪奴隷とは、違うんだよね？」

「うん、全く違うよ。そっちは、罪を犯した罰として身分を剥奪された者たちのこと。行き先も鉱山やガレー船の漕ぎ手といった過酷な場所がほとんどで、一生解放されることはないの。特に、殺人などの重罪を犯した者は、首輪に刻まれた印も違うし、万が一逃げ出しても、誰からも人間扱いされることはないのよ」

「軽犯罪でも、同じなのかな？」

「ううん、盗みや詐欺といった比較的軽い罪の者は、土木作業などに回されることが多いと聞くわ。ただ、一度犯罪奴隷に落ちてしまうと、まともな扱いを受けるのは難しい。だから、この人たちのように、ただ不運で借金を背負っただけの借金奴隷とは、立場が天と地ほど違うのよ」

なるほどな。

奴隷といっても一括りにはできない、複雑な事情があるらしい。

俺がそんなことを考えていると、作業場の隅で、一人の少女が母親のそばに座り込み、小さな咳

をしているのが目に入った。

年の頃は、日本にいる俺の娘と同じくらいだろうか。

「おい、あの子、具合でも悪いのか」

「うん……。少し熱があるみたい。だけど、母親の方は、仕事を休むわけにはいかないって……」

オリアーナの言葉に俺は何も言わず、その親子に近づいた。

母親の方が、俺の姿を見てビクリと体を震わせる。

「ご主人様……！ 申し訳ありません、すぐに仕事に戻ります。この子はじきにあちらへ……」

「いや、いい。仕事の手を止めて、子供のそばにいてやってくれ」

俺はそう言うと、スキル『異世界売買』を発動させた。

取り出したのは、日本製の冷却ジェルシートと、子供用の栄養ドリンク、それから愛らしい丸顔のヒーローが描かれた小さなビスケットの袋だ。

母親が、信じられないという顔で俺を見ている。

「これ、熱さましのシートだ。額に貼ってやってくれ。こっちは滋養のある飲み物。それと、これはお菓子だ。元気になったら、食べさせてやるといい」

「こ、こんな……こんな、高価なものを……いえ、それ以前に、奴隷の子供に、このようなお気遣いを……!？」

母親は、涙を浮かべて何度も頭を下げる。

その姿に、俺はまた胸が痛んだ。

この世界では、これが当たり前じゃない、ということなんだろうな。

「シラカワ様……」

いつの間にか隣に来ていたオリアーナが、どこか熱っぽい、潤んだ瞳で俺を見つめていた。

「……あんまり、見るなよ。格好悪いだろ」

「ううん。……すごく、素敵よ」

オリアーナは、ふわりと微笑んだ。

おっさん、結局、偽善なのかもしれないな。

奴隷制度そのものを、俺一人の力でどうこうできるわけじゃない。

だが、少なくとも、俺の目の届く範囲にいる人たちには、人間らしい、まっとうな暮らしをさせてやりたい。

そう、強く思った。

改造その四、鍛冶工場の設置。

店に続いて、離れにある、もともと窯のあったスペースを本格的な鍛冶場に改造しちまった。

スキルで耐火煉瓦や巨大な金床、ふいごなんかを取り寄せて作り上げた、自慢の工房だ。これぞまさに、男のロマンの城。

いつかは物語に出てくるような伝説の剣を打ってみたい。

そう思ったら、もう止まらなかった。

まずは、以前通りかかった街の冒険者ギルドの親切なおじさんに紹介してもらった、腕のいい鍛冶職人を訪ねてみることにした。

アフェールでも随一と評判の、ドワーフの血を引くという無骨な老人だ。

「ほう、あんたがロニーの旦那が言ってた異国人かい。で、剣を打ちたい、ねえ。鉄ならいくらでも売ってやるが、うちの道具は貸せねえぞ」

工房の主——グロム親方というらしい——は、俺の顔を見るなりそう言い放った。

「いや、道具は自分で揃える。それより、何か特別な金属はないか？ 普通の鉄じゃ面白くない」

「特別な金属、だと？ フン、素人が何を言うか。まあいい。金さえ払えば手に入るものならいくつもある。例えばミスリルとかな」

「ミスリル！」

俺が食いつくと、親方はニヤリと笑った。

「なんだい、知ってるのか。まあ、世間じゃ伝説の金属なんて言われてるが、ありゃあ半分は嘘だ。

確かに希少で、普通の剣が百本は買えるほど高価だがな。王侯貴族やS級冒険者くらいになれば、金に糸目をつけずに手に入る。本当の伝説は、神代の金属オリハルコンの方さ。そっちは本物のドワーフでも、一生のうち一度お目にかかれるかどうかになるほど。

この世界では、ミスリルとオリハルコンで、はっきり格が分かれているのか。

「そのミスリル、少し分けてもらえないだろうか」

「金次第だと言ったろう。だが、生憎と今在庫を切らしてな。あれは北の山のドワーフ共から仕入れるんだが、あいつらに関しては、金だけじゃなかなか首を縦に振らんでな」

グロム親方は、工房の奥から年代物の木箱を持ってきた。

中には、複雑な装飾が施された空のガラス瓶が入っている。

「奴ら、とにかく酒に目がなくてな。特に、珍しい銘柄の酒には目がねえ。前にこの瓶に入ってたブランドーを渡したら、小指の先ほどのミスリルを分けてくれた。王宮に献上する分とは別にな。あんたも、何か珍しい酒でも持つてるなら、話は早いかもしれんぞ」

「酒……珍しい銘柄……」

それ、俺の独壇場じゃないか！

俺の頭に、前の世界の高級ウイスキーの数々が浮かんだ。

特に、凝ったデザインのボトルで有名な日本の最高級ウイスキー。

あんなものを渡したら、ドワーフたちはどれだけ喜ぶだろうか。

これは、将来的に安定してミスリルを確保できるルートが開拓できるかもしれない。

「……親方、分かった。とりあえず、今日は普通の鉄でいい。いや、あんたの店で一番品質のいい鋼^{はがね}を売ってくれ。まずは、それで腕試しだ」

「ほう。小僧、威勢がいいじゃねえか。分かった、うちの最高級を持つていきな」

それから鋼を購入した俺は工房に戻り、スキル『異世界売買』を発動させた。

ドワーフとの取引は、また今度。ひとまずは試し打ちだ。

だが、練習だとしても、素材にはこだわりたい。

検索ウインドウに、専門的な単語を打ち込んでいく。

「工具鋼……材……いや、もつとだ。自動車のばねとかに使われる特殊鋼は……あつた」

画面に表示されたのは、日本の大手鉄鋼メーカーが製造する最高品質の特殊鋼のインゴットだった。

こいつを鍛えれば、この世界のなまくらな鉄とは比べ物にならない剣ができるはずだ。

俺は練習用も兼ねて、その特殊鋼をいくつか購入した。

早速、おっさん自身の手で剣を打ち始めたんだが……スキルというのは本当にすごいものだと思

めて感心した。

なぜおっさんに『鍛冶』スキルがあるのかは、正直よく分からない。

しかし、いざ鎚^{きね}を握って鉄を打ち始めてみたら、まるで長年修業を積んだ職人のように、体が勝手に動いたのだ。

俺、もしかして才能あつたんじゃね？　なんてな。

いや、完全にスキルのおかげです、はい。

今回は、取り寄せた日本製の特殊鋼とドワーフから購入した異世界の鋼を混ぜ合わせて打つことにした。

ふいごで火力を上げ、真っ赤に焼けた鋼の塊^{かたまり}を金床に載せ、リズムカルに鎚を振るう。

カン、カン、という澄んだ音が工房に響いた。

熱い。

汗が噴き出してくるが、不思議と苦ではなかった。

品質の高い鋼は、素直に鎚を受け入れ、火花を散らしながら理想の形へと伸びていく。

この感覚が、たまらなく楽しい。

数時間後、一本のロングソードが完成した。

刀身は黒光りし、吸い込まれそうなほどの輝きを放っている。

素人が作ったとは思えない、見事な出来栄えだ。

俺は、その剣を持って、再びグロム親方の工房を訪れた。
出来を見てもらうためだ。

「……小僧、いや、旦那。こいつは、あんたが打ったのか」

俺の剣を見るなり、グロム親方の目がカッと見開かれた。

「ああ。練習でな。どうだ？」

「どうだ、じゃねえ……。この地金の均一さ、焼き入れの確かさ……。何より、鋼そのものの質が、俺が見たこともねえ代物だ。分かった。あんたには、これを使う資格がある」

親方はそう言うのと、店の奥から、大事そうに布にくるまれた小さなインゴットを持ってきた。

銀色に鈍く輝く、紛れもないミスリルだった。

「こいつは、俺が隠し持ってた最後の一本だ。金は、まあ、その剣を俺にくれりゃあ、それでいい。いや、差額はこつちが払う」

「いや、剣はやるよ。世話になったしな」

「……そうかい。あんた、面白い男だな」

こうして、俺は図らずもミスリルを手に入れた。

工房に戻り、今度はミスリル銀を炉に入れる。

しかも、おっさんは幸いにも火・水・風・土の四属性全ての魔術を扱えるので、試しにそれらの属性の魔力を剣に込めながら鍛えてみた。

すると、何と、いわゆる『魔剣』とでも呼ぶべきものが出来上がってしまった。

その魔剣は、ミスリル銀の輝きを宿した美しい刀身を持ち、手に取ってみると恐ろしく軽く、まるで日本のビニール傘ほどの重さしかない。

本当に軽い。

これなら、おっさんでも楽々振り回せる。

まだ実際にこの魔剣で何かを斬ったり、魔物と戦ったりしたわけではないので、どんな特殊な効果があるのか、どんなことができるのかは分からない。

もしかしたら、剣先からビームとか出ちゃったりするんだろうか。

男の子の夢だよな、そういうの。

だとしたら、ちよつとだけ期待してしまうな。

そんな日々を送る中で、嬉しいニュースが入ってきた。

うちの店に展示していた、あの超高額なダイヤモンドのネックレスが、ついに金貨五千枚で売れたのだ。

どこかの大貴族の奥方が、パーティーで身に着けるために買っていていかれたそうだ。金持ちって、本当にスケールが違う。おっさんには、想像もつかない世界だ。

第二話 帝都への誘いと忍び寄る影

「シラカワさん、実は近々、帝都プレジールへ向かうことになったのだが、もしよろしければ、一緒にいていただけないだろうか」

我が家の改造も一段落し、店も何とか軌道に乗り始めた、そんなある日のこと。

トレイナー商会のロニーさんが突然そんな提案を携えて、我が家を訪ねてきた。

どうやら以前、セアリアス帝国の皇帝陛下に貢物をしてみては、と言っていた件が、いよいよ具体的に動き出したということらしい。

「えーと、それはつまり、皇帝陛下に直接お会いする、ということですか」
うわ、来たよ。

一番面倒くさいやつが。

「その通り。実は、私の方から帝都の宮廷へ手紙を出し、シラカワさんが献上したいと望んでいる素晴らしい品々について内々に伝えたところ、何と、エトムント・リーネルト陛下ご自身が、シラカワさんに直接お会いしてくださるとの、ありがたいお返事を頂戴したのです。こんな機会は、一介の商人が一生に一度経験できるかどうかというほどの栄誉。ぜひともシラカワさんに、陛下にお目通り願いたいのです」

面倒くさいことになりそうな予感しかない……。

俺の小心者センサーが、また警報を鳴らしてるぞ。

だが、このセアリアス帝国で、それなりに大きな商売をして腰を落ち着けるつもりなら、いずれは避けられない道だったのかもしれないな。

できれば、あまり権力の中核とは関わらず、細々と目立たないように暮らしていきたくったんだが、もう今さら手遅れか。

だが、待てよ。

皇帝に会えるってことは、何か特別な情報……例えば、日本への帰り方とか、そういう話が聞けるチャンスかもしれない。

そう思うと、少しだけ気も変わってくる。

これも、日本に帰るための情報を得る一歩だと思えば……しゃーないか。

おっさん、自分の店を開いてからというものの、最初のうちは慣れないことばかりで忙しかった。ただ、最近ではようやく経営者という立場にも落ち着いてきた。

ちなみに、なんだかんだ言ってオリアーナもトレイナー商会の仕事で十分に忙しいので、結局、うちの店の店長は、オリアーナが特に信頼して推薦してくれた、腕利きの女性に任せることになった。

彼女の経営手腕は確かなものだ。

しばらく離れても大きな問題はないだろう。

そんなこんなで、さらに一週間が経ち、おっさんは、ロニーさんと共に帝都プレジールに赴くことになった。

もちろん、メーネアちゃんと香苗ちゃんも、おっさんの『妻』として同行することになる。

まあ、正式な妻ってわけじゃないんだがな。

この世界では二人くらいの年頃の女性が独身でいると目立ってしまうらしく、対外的には異国からやってきた商人であるおっさんの妻ということにしているのだ。

彼女たちがそう名乗ってくれるのは、嬉しいような、くすぐったいような。

でも、そのへんの話も、ちゃんとしとかなないと、あとあと面倒なことになりそうだ。

そして、トレイナー商会からは、万が一の商談や貴族との折衝に備えて、オリアーナも一緒に来ることになった。

護衛の冒険者たちも、トレイナー商会が万全の態勢で手配してくれた。

「あなた。わたくしも、帝都に赴くにあたっては、何か高価な宝石の一つでも身に着けた方がよろしいでしょうか」

いつの間にか、メーネアちゃんのおっさんへの対外的な呼び方が「旦那様」から「あなた」に変わっていた。

何だか、急に夫婦っぽくなった気がして、少し照れくさい。

そして、香苗ちゃんはというと。

「あ・な・た。向こうへ着いたら、この前新調した、あの青いドレスを着た方がいいでしょうか。それとも、あっちの赤い方が、陛下のお好みに合うでしょうか」

と、少し前まで「白河さん」と呼んでいたのが、やはり「あなた」と……。

いや、若干イントネーションが違うような気もするが……そう呼ぶようになっていた。おっさん、彼女たちの好意には感謝してるんだが、この距離感、心臓に悪いって……。

それにしても、帝都プレジールで、日本に帰るための新しい情報が見つければいいんだがな。皇帝なんていう、一番偉い奴に会えるんだ。

何か知ってるかもしれないだろ。

そんな、切実な願いを胸に抱いていると。

「ねえねえ、シラカワ様。あたいのこと、いつになったらちゃんと抱いてくれるの」
出発の準備で慌ただしい中、オリアーナが不意にそんなことを耳元で囁いてきた。

メーネアちゃんと香苗ちゃんという、(自称) 異世界の嫁が二人もいるというのに、これ以上は
本当にお腹いっぱいですから！

「……つて、おい！ ちょっと何するんだ、いきなり！」

またもや不意打ちで抱きついてきたよ、このお嬢は。

だから、やめてくれて。

おっさんの甲斐性では、もうこれ以上は本当に無理なんだつてば！



帝都プレジール。

セアリアス帝国の首都であり、皇帝エトムント・リーネルトがその全権を以て統治している壮麗な都だ。

おっさん一行は、道中何事もなく無事に王都に到着した。

そして今、皇帝の居城であり、帝国の支配の中心でもあるプレジール城、その玉座の間へと続く
広間に通されている。

宿で旅装を解く間もなく、なぜか朝一番で城から迎える馬車が来ていて、急いで参内するように
と、かなり強引にせかされた結果がこれだ。

おっさん達は慌てて皇帝陛下に謁見する準備を進めていた。

「おい！ まだ来ないのか！ 待ちくたびれたぞ！ 早くトレイナーと、あの面白いと評判の『異
国の商人』をここに連れてまいれ！」

そのとき、玉座の間の方から、やや甲高い、しかしよく通る声が響いてきた。
おそらく、これが皇帝陛下の声だろう。

「陛下、恐れながら申し上げます。トレイナー様ご一行は、まだ到着されたばかりとのことでござ
います。今しばらくお待ちくださいませぬか」

側近らしき、落ち着いた声の男性が窘める。

「そんな悠長な言葉は聞きたくないわ！ いいから、急いで連れてこいと申しておるのだ！」

「は、ははっ。かしこまりました。では、大至急お連れするよう手配いたしますので、これにて一
旦失礼いたします」

「うむ、分かればよいのだ、分かればな」

側近の男性が慌てて退出していく。

何だか、随分とわがままな皇帝陛下とお見受けするが……子供かよ。

ただ、伝え聞くところによると、帝都の民からは非常に慕われている名君なのとか。

民の声にもよく耳を傾け、ときには自ら城下にお忍びで出て、直接民衆と触れ合うこともあるという。

その豪放磊落な性格と、民を思う深い慈愛の心が、人々の心を掴んでいるという話だ。

「ロニー・トレイナー様、そしてシラカワコジロウ様、この度はお越しいただき恐悦至極に存じます。長旅でお疲れのところ大変申し訳ございませんが、陛下がしびれを切らしてお待ちかねでございますゆえ、このまま玉座の間へお入りください」

側近の男性が、息を切らしながらやってきた。

……普通、皇帝陛下に謁見するとなれば、事前にいろいろと面倒な手続きとか、作法の講習とかがあるんじゃないのか。

それを全部すつ飛ばして、いきなり本丸とは。

どんだけ急いでるんだか、あの皇帝陛下は。

玉座の間に入り、おっさんはあたりを見回した。

流石はお城。

天井は高いし、柱は太いし、床はピカピカだし。

壁には見事なタペストリーが飾られ、そこかしこに高価そうな調度品が置かれている。

いい雰囲気出してるなあ、本当に。

インダルチャンス王国では、とてもじゃないが城内をゆっくり観光するような余裕はなかったからな。

どんな感じだったかほとんど覚えていないけど、こうして改めて異世界の城というものを見てみると、ここは本当にファンタジーの世界なんだな、と実感する。

おお。ここが、いわゆる謁見の間か。

王様とかにお目通りする、あの場所だな。

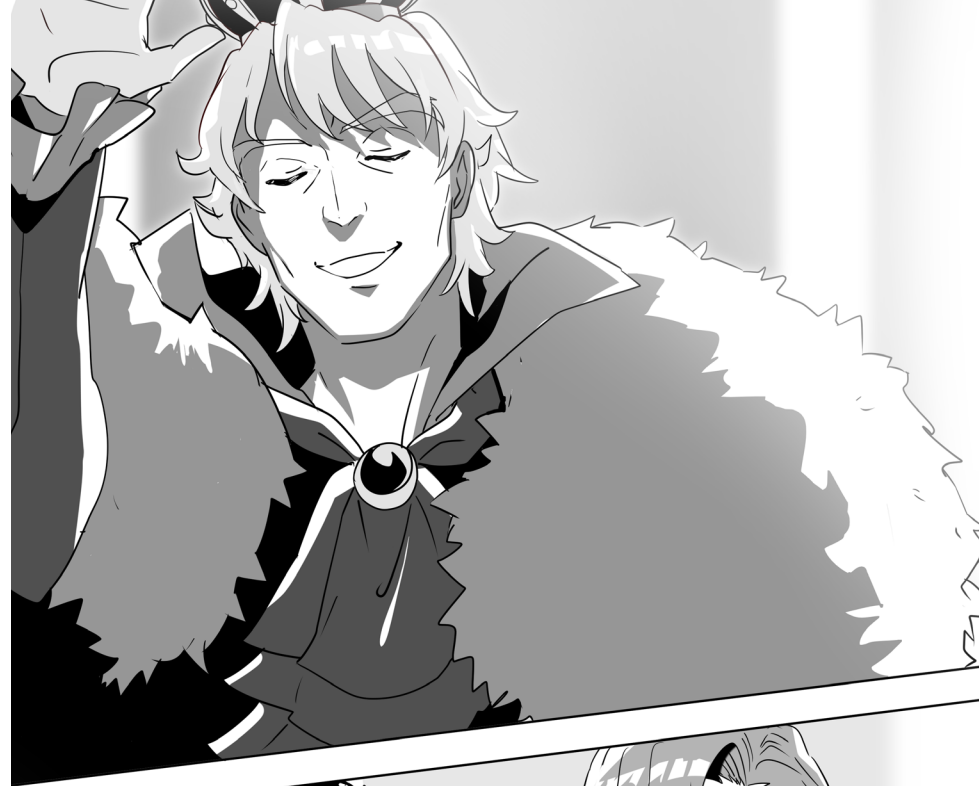
何だか、ワクワクするじゃないか。

お、早速、玉座の方から偉そうなのが歩いてきたぞ！

あれが、このセリアス帝国の皇帝陛下って奴か。

思ったより若いな。

年の頃は、おっさんと同じぐらいか、少し下かもしれない。



精悍な顔つきをしている。

「おお！ 待っていたぞ！ ロニー、久しいな！」

皇帝陛下は、快活な笑顔でロニーさんに声をかけた。

「これはエトムント陛下。ご機嫌麗しく、何よりに存じ上げます」

ロニーさんが、深々と頭を下げる。

「おいおい、ロニーよ。お主と余の仲ではないか。そんな堅苦しい挨拶はなしでいこうぞ！ で、そちらにおるのが、噂のシラカワとかいう、面白いおっさんか」

皇帝陛下は、好奇心に満ちた目で俺を値踏みするように見てくる。

「はい、陛下。ご紹介が遅れました。こちらが、シラカワコジロウ殿でございます」

ロニーさんが相変わらずの丁寧な口調で俺を紹介してくれる。

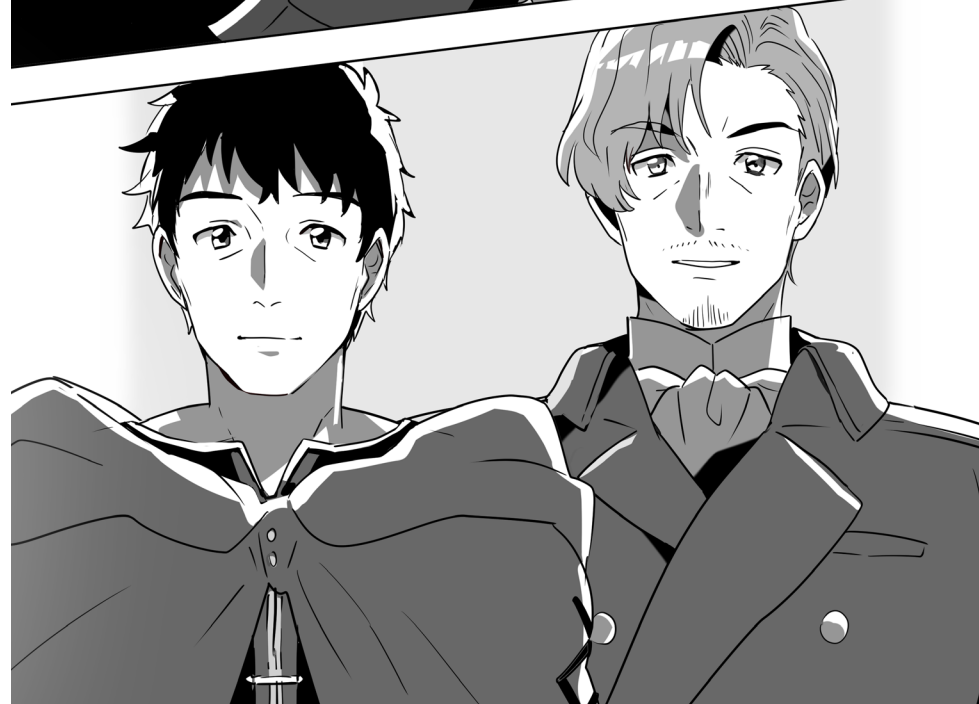
「そうかそうか。お主がシラカワか。敬語なんかいらんからな」

うわ、思ったよりもずっと気さくだな、この人。

というか、距離感がおかしい。

「はじめまして……だな。俺は白河小次郎だ。まあ、よろしく頼むよ」

俺は、ロニーさんには悪いが、皇帝の言葉に甘えて敬語はとらせてもらうことにした。



「おうおう、待つておったぞ、シラカワ！ やはりその方がよい！ 堅苦しいのは性に合わん！」
「そりやどうも。で、もしかして、あんたは俺のことをお待ちかねだったのか？」
「その通りだ！ ロニーからの手紙で、あんたの噂はかねがね聞いておった。どうやら、あの便利な無限収納カバンを、余に献上してくれるという話ではないか。それで、そのカバンはどこにあるのだ。早く見せてくれ」

どんな噂を聞いているか知らないけど……まあ、概ねそんな感じか。

「ああ、そうだよ。その無限収納カバンは、あんたに献上する予定の品の一つだぜ」

「おお！ そうか！ まだ他にも何かいいものがあるというのか！ それは楽しみだ！ お、シラカワ、あんたの後ろに控えておるご婦人方は、どちらも大変な美人揃いではないか！もしかして、そのご婦人方も、余への献上品であつたりするのかな」

皇帝が、ニヤニヤしながらとんでもないことを言う。

おいおい、セクハラだぞ、それ。

パワハラもプラスして、コンプライアンス的にアウトだぞ。

「おいおい、やめてくれよ、陛下。彼女たちはそういう対象じゃないんでな。冗談でもそういうのは勘弁してくれ」

俺が釘を刺すと、皇帝は「がつはつは！」と豪快に笑った。

「そうかそうか、それは失礼した！ って、ん。よく見れば、その一人は、ロニーの娘のオリアーナではないか。おい、ロニー、いくら余でも、結婚の時期を大きく過ぎた婦人は、ちと好みに合わんぞ！」

皇帝が、オリアーナを見て、またもや失礼なことを言う。

この世界では、やはり二十五歳を過ぎた女性には、結婚が遅いと見なされる風潮が強いらしい。

オリアーナ、めっちゃいい娘さんなのに、失礼な皇帝だな、おい。

あとで裏庭に來い、説教してやる。

「いえ、陛下、誠に申し訳ございませんが、実は、娘のオリアーナは、既にこちらのシラカワ様の妻の一人として、お仕えることになっておりますので」

ロニーさんが、しれっとそんなことを言った。

……って、おい！

だから、まだもらってねーし！

何、その、おっさんが既にオリアーナを妻にした前提みたいな話し方は！

隣でオリアーナも、頬を染めてもじもしてるんじゃないよ！

「おお！ そうであつたか！ シラカワ、あんたも隅に置けんな！ わざわざ年嵩の婦人を娶るとは、なかなか物好きよのう！ まあ、このオリアーナの氣立てのよさと商才は、この余が保証する。